

## 10. HIV 抗体検査のありかたをめぐる一考察

宮城 昌子

(群馬大院・医・医学哲学・倫理学)

先進国のなかで我が国における HIV/AIDS の感染者数の増加は際立って顕著であることがいわれて久しい。それに伴いこの十余年のあいだに、本国における感染予防対策や HIV/AIDS 抗体検査の普及の対象は、より効率的な方法を求めるなかで、広く一般をターゲットにするものからハイリスク集団としての「個別施策層」へと焦点が移り変わってきている。一方で 2006 年 9 月、米国疾病予防管理センターは 13～64 歳の米国民全員に対する HIV 抗体検査ルーチン化推進策を発表した。これは、米国においてすでにルーチン化を進めているハイリスク集団や妊婦等の一部の対象に加え、法的義務はないもののすべての国民が緊急時や定期健診時にも標準の健康検査の一部として HIV 抗体検査を受けるよう推奨するものである。これを受け近年本国においても、一般の外来診療で積極的に HIV 抗体検査を行うことを推進する動きが一部でおこっている。個別施策層への予防的介入および検査の普及という方法をして感染者減を実現できていない本国の HIV/AIDS をとりまく閉塞的状况において、このような米国の方針はひとつの指針となる力を持ち得ると考える動きもみられている。しかし同時に、本国の背景において慎重に考察すべき倫理的問題がいまだ多く存在するのを忘れてはならない。本発表では、検査のルーチン化や近年一般に普及してきている自宅検査キットも含め、その背景や重ねられている議論を整理し踏まえた上で、これからの HIV 抗体検査の望ましいあり方について倫理的な考察を試みる。

## 11. 高校生における麻疹予防接種歴調査、抗体価測定と予防教育

豊島 幸子, 畑生 俊光, 嶋田 淳子

(群馬大医・保・応用検査学)

大平 孝雄, 八木 秀明

(群馬県立勢多農林高等学校)

学校など集団生活の場では感染症の流行を起こしやすい。最近では高校・大学で、麻疹が流行し、学校保健において感染症の予防とその対応は重要な課題である。【目的】群馬県内 S 高校では 2007 年 6 月に 7 名の麻疹感染者が発生した。そこで、麻疹予防接種歴調査および麻疹抗体保有率測定を行い、麻疹・予防接種の状況および予防に関する認知度を把握し、高校生の保健教育を充実させる。【方法】1) S 高校の全校生徒 (681 名) の入学時保健調査票から、予防接種記入欄の麻疹既往歴および予防接種歴を抽出した。2) 個々の麻疹の抗体保有率を把握するため、任意の希望者 331 名を対象として採血を

行い、血清中の麻疹の抗体価を測定した。3) 予防接種に関する認知度を把握するため、調査票によるアンケート調査を抗体価測定前後の 2 回行い、効果を調べた。【結果と考察】1) 保健調査票から、予防接種記入欄の麻疹既往歴および予防接種歴を抽出した結果、麻疹罹患歴者は 73 名 (10.7%) であり、麻疹ワクチン未接種者は 86 名 (13.1%)、麻疹ワクチン 1 回接種者は 591 名 (86.8%)、麻疹ワクチン 2 回接種者は 0 名 (0%)、不明は 4 名 (0.6%) であった。麻疹ワクチン未接種で麻疹罹患歴のない生徒は 13 名であった。2) 麻疹抗体価測定者 331 名について抗体価測定を行った結果、麻疹抗体価が陰性の生徒は 22 名であった。この結果を個々に知らせ、予防接種を勧奨した。3) 抗体価測定前後のアンケート調査 331 名では、抗体価測定前は麻疹の抗体価に関する認知率が低かったが、抗体価測定後には「抗原・抗体という言葉を知っている」は 30.6% から 50.1% に、「抗体価について知っている」は 3.6% から 21.8% に増加した。抗体価測定後のアンケート調査の結果から、抗体の重要性の理解度が増し、ワクチン接種を促すためには抗体価測定が効果的であったと考えられた。

## 12. 保健所保健師の相談からみた難病相談支援センターの新たな機能

川尻 洋美, 金古さつき, 岡田 美砂

(群馬県難病相談支援センター)

牛久保美津子 (群馬大医・保・地域看護学)

岡本 幸市 (群馬大院・医・脳神経内科学)

【目的】難病病相談支援センター (以下、センター) のここ数年間の相談実績では、療養者・家族からの相談が約 4～5 割、支援者が約 4 割を占める。支援者の中では、保健所保健師からの相談が最も多い。本研究では、保健所保健師の相談の具体的内容を分析し、センター機能の検討を行うことを目的とした。【対象と方法】平成 19 年度にセンターの相談事業が対応した保健師からの相談 319 件を対象とし、その相談記録から、1) 相談方法、2) 相談対象の疾患名、3) 相談内容についてのデータを収集した。基本統計および相談内容は質的帰納的分析法を用いて 3 段階の抽象化を行った。【結果と考察】1) 相談方法: 電話が最も多く (64.6%)、次いでメール (29.2%) であった。2) 相談対象疾患: 14 疾患あったが、筋萎縮性側索硬化症 (70%) をはじめとする神経難病が上位 9 位までを占めていたことから、保健師が進行性、希少性の神経難病への支援に苦慮している状況が明らかになった。3) 相談内容: 相談 319 件から 372 件の内容が抽出され、《個別支援の協働》《情報提供依頼》《その他》の 3 つに大分類された。《個別支援の協働》は 72.6% で最も多く、〈療養者の状況変化や支援結果の報告〉〈支援方法につい

ての助言が欲しい)＜支援方法や方針を一緒に検討してほしい＞などであった。《情報提供依頼》は 14.5%で、＜病気や治療＞＜高度な医療処置＞＜専門診療科を有する医療機関＞であった。

以上より、保健所保健師が難病相談支援センターの相談支援員に求めていることは、①行った支援を振り返る時間の共有、②支援方法についての助言、③支援方法や方針を一緒に検討、④難病に関する多様で専門的な情報の提供と考えられた。難病相談支援センターは、療養者や家族の相談に直接応じるだけでなく、保健所保健師に対する支援を行うことで療養者や家族に対して間接的にサポートをしていることが明らかになり、“支援者の支援”といった新たなセンター機能が見いだされた。

### 13. An inverse correlation of plasma Se level and MCP-1 in people with metabolic syndrome

Mutakin, Kenji Kobayashi, Chiho Yamazaki,  
Satomi Kameo and Hiroshi Koyama  
(Department of Public Health, Gunma University Graduate School of Medicine)

**Introduction:** Selenium (Se) deficiency has been associated with the development of the diseases including cardiovascular disease (CVD). Obesity is associated with metabolic syndrome (MS) and higher CVD risk. This study investigates the relationship between plasma Se level and the biomarkers of MS for the prevention of CVD. **Method:** The plasma samples of the obese male subjects (N=78) were analyzed for the Se level and their biomarkers of MS. Pearson's correlation was used for statistical analysis. **Result and Discussion:** An inverse correlation ( $r = -0.229$ ,  $p < 0.05$ ) between plasma Se and monocyte chemoattractant protein-1 (MCP-1) levels was observed. The result indicates that Se may play a role in MCP-1 regulation, which may delay the development of CVD.

### 14. The effect of Total Knee Arthroplasty Surgery on plasma selenium concentration and glutathione peroxidase activity

Irma R Defi, Chiho Yamazaki,  
Satomi Kameo, Kenji Kobayashi  
and Hiroshi Koyama  
(Department of Public Health, Gunma University Graduate School of Medicine)

**Introduction:** There are 3 major selenium (Se)-containing proteins in plasma; glutathione peroxidase (GPx), selenoprotein P (SelP) and albumin. SelP acts as a Se

transporter and mobilizes Se to kidney to produce extracellular GPx. Surgery causes an upsurge of free radicals. Total knee arthroplasty (TKA) surgery for knee osteoarthritis is known to decrease plasma Se concentration. In this study, we analyzed plasma Se concentration and GPx activity in order to understand the role of Se in TKA surgery. **Method:** Venous blood samples were collected from patients before and after TKA surgery. Plasma Se concentration and GPx activity were measured. Paired t-test was used for statistical analysis. **Results and Discussion:** Significant increase in plasma GPx activity and decrease in plasma Se concentration were observed after surgery (paired t-test,  $p < 0.01$  and  $p < 0.05$ , respectively). These results show that Se may play a role in TKA surgery by catalyzing hydrogen peroxides in the form of GPx and prevent formation of the free radicals.

### 15. 姿勢が膝関節に及ぼす影響について

佐藤 直樹, 山本 敦史, 柳澤 真也  
大沢 敏久, 小林 勉, 飯塚 伯  
佐藤 貴久, 西野昌宏, 米本由木夫  
細川 高史, 高岸 憲二

(群馬大院・医・整形外科)

**【目的】** 変形性膝関節症 (以下膝 OA) の危険因子としては、年齢、体重、女性、肥満、内反変形についてはエビデンスが得られているが、それ以外のものについては明確な答えはでない。本研究の目的は膝 OA の疫学研究の一助として姿勢が膝関節に及ぼす影響を明らかにすることである。**【対象と方法】** 地域検診を行った 60 歳以上の 310 人 620 膝 (男性 242 膝、女性 378 膝、平均年齢 69.7 歳) を対象とした。検診内容は膝痛に関する問診、理学所見として膝関節可動域、大腿骨内顆間距離とした。姿勢評価はデジタルカメラ撮影による立位側面像を撮影し、中谷の分類に従って、正常、胸椎後弯、腰椎後弯、平背、腰椎前弯 (以下各々 I 型、II 型、III 型、IV 型、V 型) の 5 型に分類した。各々の姿勢分類ごとの有症率、伸展制限、屈曲角度、内顆間距離について比較検討を行った。統計学的処理にあたっては危険率 5% 未満を有意とした。**【結果】** I 型 42.6%、II 型 25.8%、III 型 6.5%、IV 型 7.4%、V 型 17.7% であり、有症率は I 型の 13.3%、II 型の 29.4%、III 型の 40.0%、IV 型の 34.8%、V 型の 30.9% に認めた。可動域 (°) は、I 型  $-4.0 \pm 5.2 / 135.4 \pm 10.3$ 、II 型  $-3.8 \pm 5.4 / 136.0 \pm 10.4$ 、III 型  $-7.0 \pm 7.0 / 129 \pm 16.5$ 、IV 型  $-3.4 \pm 5.2 / 138.4 \pm 14.0$ 、V 型  $-3.9 \pm 6.9 / 136.4 \pm 15.3$  であった。内顆間距離 (mm) は、I 型  $16.9 \pm 17.8$ 、II 型  $18.7 \pm 20.0$ 、III 型  $32.8 \pm 28.3$ 、IV 型  $13.3 \pm 14.7$ 、V 型  $12.3 \pm 15.9$  であった。多重比較検定の結果から有症率は I 型に比べ他型が有意